



A.A.C (コミュニケーションの補助・代替手段)

南大阪療育園心理判定員 広川 律子

今回は、最近、技術進歩の著しいAAC機器についてお話ししましょう。

肢体不自由児(者)用のAACといえば、従来コミュニケーションボードを用いる方法が一般的でした。そこでは主として写真や絵、シンボル・ピクトグラム、文字などが媒体として用いられていました。このようないわゆる“ローテク”の方法も、導入の初期には教(療)育現場で大きな抵抗がありました。しかし、発語困難な人達をイエスとノーの合図だけのコミュニケーションに閉じ込めるのではなく、自発的な表現方法を保障することの意味について近年、序々に理解が深まってきました。そのような理解を一気にすすめたのが、近年のマイクロコンピュータをベースにした“ハイテク”機器の開発でした。その意味では1986年に発売された“トーキングエイド”(ナムコ社)は画期的な製品であり、AAC機器使用の意義を明快に語るものであったといえます。それと同時に、“トーキングエイド”が種々の制約(身体的、知的)のために利用できない人々のニーズも他方で明らかになってきたのです。その結果、あまりカッコよくないこともあってか、それまで敬遠されがちであった上に述べたような“ローテク”による方法も改めて見直されるようになったという経緯があります。

さて、AAC機器の使用についてですが、子どもの場合はとくに、発達段階を考慮して段階的にすすめる必要があります。それでは機器に向きあう迄にはどんな“準備”が必要なのでしょうか？まず第一には、コミュニケーションボードやサインなどを仲立ちにして、周囲の人との関係を豊かなものにすることが大前提となります。第二には、機器に付属するスイッチの操作という難関をクリアする必要があります。AAC機器を使用する人達の多くは、上肢機能にも障害があるのでキーボードはもちろん、ワンスイッチの操作でさえ難しい場合が殆どです。ですから、幼児期より玩具に接続したスイッチ操作の練習を遊びながらするのもいいでしょう。TVのリモコンに改良を加えて日常生活に活用できるような工夫をすれば子どもの意欲や自発性をいっそう高めることになるでしょう。これらは将来のAAC機器使用の可能性の有無にかかわらず肢体不自由児にとって一度はトライしてみる価値があります。子ども達のいろんな可能性を引き出せるばかりか周囲の人たちとの関係をも変えることができるのではないのでしょうか？第三には、準備プログラムの開発が必要となります。使用する機器がコンピュータであれ、ランゲージボードであれ、その練習のための“準備プログラム”が不可欠です。そこではそれぞれの機器で用いられるシンボル、ピクトグラム、文

字などの学習が使用者の発達段階に応じてなされます。

では、AAC機器使用の“強み”はどんなところにあるのでしょうか？

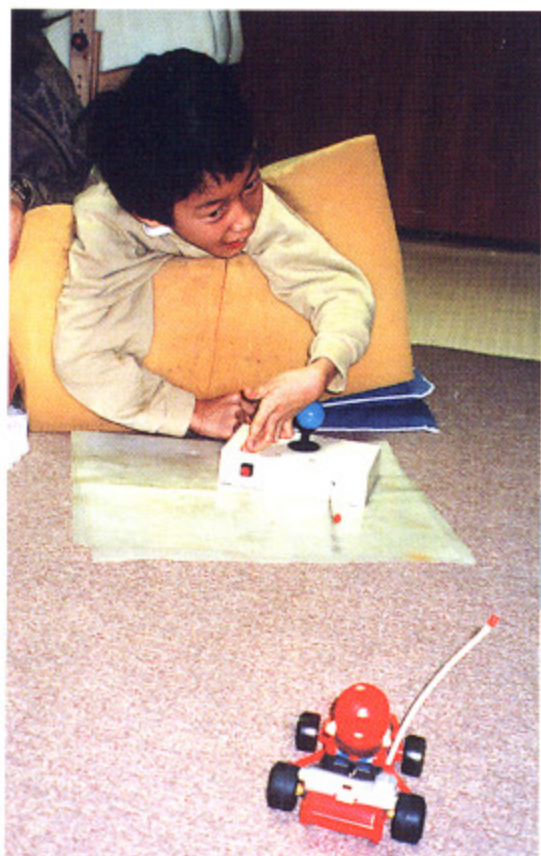
第一は、スイッチ操作ひとつでシンボルや文字が選べることです。上肢機能の障害が重くても、練習とスイッチとの相性次第で上達が可能です。第二は、大抵のAACには音声発生装置がついていますので使用者本人にとってはフィードバックが容易ですし、聞き手にとっては理解がウンとらしくになります。第三は、印刷機能がついていると保存が簡単にできますし、できあがりもきれいで満足感が得られます。第四は、大変重要な視点ですが、メッセージの作成の際にプライバシーが一定程度守られるということです。プライバシーの保障されないところに自立の芽は育ちません。第五は、コンピュータという時代の先端技術にふれることによって障害をもった人達が自信や充足感をもつことができるという点です。

私たちは、1981年より、サウンズ アンド シンボルズ(S&S)をAACとして日本に紹介してきましたが、機能的により重度の人達のためにコンピュータ版を開発し現在、多くの学校などで活用されています。(商品名：とーくでっせVer.1。MSXⅡ型対応のものも開発されています。)入力にはワンスイッチのスキャン方式ですので、使いこなすまでには上に述べたような“準備”が周到になされる必要があります。今後、AAC使用者の年齢や障害種別、重症度が多様化するにつれて、さまざまな“準備プログラム”の開発が玩具・日用品・スイッチ・ソフトウェアなど総合的な観点から要求されてくるでしょう。

(S&Sおよび“準備プログラム”の詳細については「改訂版・サウンズ アンド シンボルズ」—当社取扱い—を御覧ください。)



〈その3〉



「マリオ、かかってこい！」
(スイッチの練習用の
リモコンカー)

加古川市立つつじ療育園
ST 大城克彦氏提供



「チャンネルはボクにまかせて！」
(TVのチャンネル変更、on-offができます)



「準備プログラム」
オーストラリア・ロゼリースクールでは、肢体不自由児の総合教育を実施しており、教室には写真のようなコンピュータコーナーがあり、OTと一緒に楽しく練習をします。



「私のAAC」
オーストラリア・ロゼリースクールでは、普通学級で自在にAACを使いこなす子どもたちがたくさんいます。



「冗談も言えるよ」
とーくでっせVer.1を使用するAN君は小学校5年生。



「作業所での仕事にも使えるようになりたいナ…」漢字Pワードを愛用するTM君は、これでゲームの味をおぼえてしまいました。